

## 佐賀大会の思いで

宮脇博巳(佐賀大学)

研究会のご発足20周年誠におめでとうございます。

佐賀大会の前年、北海道の釧路からお帰りになった岩村政浩氏が「えらい物を、引き受けてしまった」と切り出したところから、皆様とお知り合いになる物語が始まったわけでした。

暑いさなかに、賑やかに佐賀平野のヒシモドキ、オニバス、ヒメコウホネ、シチメンソウなどを観察できましたことを昨日のように思い出されます。

裏話としては、宿泊場所とした某ホテルに岩村氏の長年の人脈があり、信じられない格安の料金でマイクロバスを調達出来たことが大会成功の秘訣でした。さらに、私として最も感動したのは会

員の皆様が、佐賀平野で何十年ぶりに発生したオニバスの葉と花を観察している間の出来事でした。その時、下見の時に掛け合った区長さんの指示通りにマイクロバスを所定の場所に移動をお願いしていたのですが、その際運転手さんが「佐賀のクレークの植物を見に日本全国からこんなに来られることを知りオイ(佐賀弁で”私”のこと)はうれしか。今まで知らんやたったが、本当に郷土の誇りです」と涙を流されんばかりに語られたことでした。

早いものであれから6年、私が知る限りではあの地点ではオニバスはその後発生していないようです。当分種子で休眠状態の様です。

---

## 水草研究会全国集会誘致の残したものの

富沢日出夫(霧多布湿原センター)

はじめに

今考えてもとてもハラハラドキドキの全国集会誘致だったと思います。学会や研究会に参加した経験はありましたが、その運営となるとまったくの素人でした。よく準備が出来たものだと我ながら感心しているところです。

「学会で町おこしをしよう！」などという不純な(?)動機ではじめた誘致だったのですが、偶然にも第20回目の記念すべき全国集会を引き受けることになり、大変良い経験が出来たと喜んでいきます。すでに研究会誌々上で紹介しましたが、私たちの町での全国集会の誘致は私の上司の一言で始まります。「学会って一種のエコツアーだよな〜……」。今回はその背景となる町の事情や、私

の個人的な事情等の裏話をお話したいと思います。

### 霧多布湿原の保全に向けて

私の住む浜中町は人口8,000人に満たない、道東に一般的にみられる漁業と酪農業が基幹産業の過疎の小さな町です。そこに私の勤務する霧多布湿原センターが建設されたのは、ラムサール条約締約国釧路会議が開催される平成5年のことでした。霧多布湿原センターは、霧多布湿原や町内の自然環境の保全を通じた地域の活性化をねらっており、守備範囲が極めて大きく、自然環境に関する教育普及活動から、地域活性化のための事業、さらには地場産品を利用した新商品の開発まで、